

一〇
趣下にては廉潔之儀に候得共被爲於上に而は聚斂之御所置にも相當り思召には甚以不相叶候間右之願は不被遊御許容旨に而別段早々難有御沙汰之事共有之誠に感泣銘肝之至に候乍併御許容無之は人君之道を被爲盡候譯に而臣下之身に候而は彌以抽誠忠可申筈之處難有蒙御沙汰迎御時節柄御料の膏腹之土地居就領知罷在候而は如何にも不相當之筋と被存何分安し不申候に付尙又申談高免之場所差上度素願に而打碎候得は此外にも品々相合候微意は御損益を計又は私之譽聞を求候儀には然之國家之御爲と存込委細再願書に建白致候通に有之殊に兩大城傍近のみ御料所に被仰出候得共諸大名其外飛地之分纔に平常之用向辨候迄家來差置甚手薄に有之且民情も自然疎遠に而萬端城附之如くには行届不申候間飛地分不殘城附領地並之免合に而一纏めに被仰付候得は御趣意にも相當銘々持高丈之取締出來安心之義之旨申上候處件々之旨趣委細被爲聽召分折角之存込に而再願之上は可被遊御聞届旨被仰出微忠之赤心誠に以難有次第に候若年寄衆御側衆も同様願之趣入御聞候處是又御許容に相成候此度上地被仰付候面々に茂奕世之御鴻恩奉報度誠心を以同様之存候得共一己之勝手都合のみ拘牽致異存之輩も候は被申出候様無急度可被相達候

右之外衣食住金銀籠甲髪飾等之都而驕りケ間敷事御制禁之公義御觸出候得共留記無之乍去山形に而も水野越前様は御利き者に而御嚴敷御方に而諸國に隱密御入置被成と云事だに寄て少も油断はならぬと彼是世間の振合を見て居る内に町同心は見懸次第に差て居る櫛簪に目を付け二三本宛取上參り娘子の泣た咄杯聞くに付けても取るなども云はれず欠所藏に束て入置し事有り

一前書被仰出たる御觸の事に就而も御家は無間に稀成御領分計御頂戴之事故何れも怖々致居候處天保十三寅年八月中武州御領分三萬六千石餘不殘羽州御城附に替地被仰付奉恐入川越御引渡濟之上御陣屋詰郡奉行高畑氏は定府勤に轉役高野等五郎始利根川繁右衛門關係礮兵衛等附ぞく之者各山形へ下り何れも素と通り民政被勤候然處同年六月中河州御領分も上地被仰付驚入途方に暮當惑無此上目と目を見合居候處其情態自然公邊に而も御分り被遊候事哉同年十月中河州之義は其儘御据置被仰出一同恐悅には奉存候得共夫迄連年之御引け分にて御家中之艱難致居候を親敷御覽遊はされ御不敏に被爲思召御家中借財弁損被成下何れも御仁惠之程厚奉拜戴候處其年十月被遊御隱居候扨同君御歸城之頃は御父君四度迄之御歸城被爲有御政事向萬端御差圖被

爲届御守成之御場合故別段尊慮を被爲御勞候程之儀も不被爲在候得共色々打續き御物入多之御事故都而尊慮通りにも不被爲届御家臣之者も奉恐察何かな御益筋之事を企て御手許を御寛め申上度存慮故御領分菅澤村は銅山故以前は盛山之事も有之由夫等之事も致穿鑿候處其山は上の山領と峰境に而双方に而堀込候故穴之中に而双方の槌音聞ゆる様に成別に能き蔓も無き故休山に成届由又此山は松茸の能出る山に而御歸城年は留め山に相成御慰に被爲入我等坏も一度御供被仰付候事も有之候

一前に茂認置候

永朝君御召馬常磐萬歳に而御領分於長谷堂村子を取る事を御馬や向之考に而幸古く厩中間に而萬治と申者子の取方心得居候由にて御聞濟に相成筋能き女馬を御買入相成日限を聞くと御家中に而も見た事も無き故我も〱と大勢見物に出懸野原の場所能き所を見立女馬を繋ぎ置男馬を牽出したる處女馬を見たりと云と目色を替へ狂亂の如く騒出し兩口に而も引釣らるゝ程之勢ひに而見物人も成丈遠くに離れて〱と制せらるゝ程之事に而女馬の方に而も蹴る喰付中々馴たる馬丁ても實に側に寄り兼見て居る内に當つたに付近寄て見ればこう門に當て居たる由

右者御馬役朝倉只七之役に而出役戻土足故御玄關に而御逢被下様にと申入實父治部允江届之節側に而聞し儘記す其後之様子聞けは厩を引出時は同斷なれど女男之間自然心易く成狂亂も薄く側に寄りても格別あぶなくも無く成女馬に乗り懸りたる時陰莖之先開過る故夫を握り潰してあてがへ遣る由其上別るゝ時女馬の腹を二つ三つ下を蹴上る此場合後るれば湯水流れ出て孕兼る事有と云語り此仕方に而鹿毛男馬貳疋産る然る處三歳になりても至而小馬にて土佐駒の如く人を乗せるを嫌ひ漸々二三人懸りに而乗上る哉直く立たり蹴たり首綱引ももて餘し御馬役も困り果逆も御用馬に成る馬に無之故表馬に下けるゝ外なしと申上濟而も聞怖して誰も頂戴人無之語り肥取馬に成りし也又は穢多之手に懸りし也其先きはしらす

一御領分上の山塚にて久保手ヶ原と云原有り山三方より雨水の下るか故に芝原なから常にじく〱直に草鞋へ通る程之場所故夫へ堤を築立用水溜としたる場所故冬氣は雁鴨の多く集る池也外に害にも不成事故鯉ナマズを仕立たらば御益筋の一つにも可成と黒千十郎兵衛木呂子善兵衛以下にては萩原片右衛門等目論見老衆へ申立試なら不苦迄免しを受御隣國米澤の鯉鯉の子を取寄せ其沼に放し黒子方へは眞四角之大池

を堀隣家石川莊太夫の蓮池を浚長山次男平の庭にも池を堀久保手へ放し残りを入れ色々手入も有し様子なれ共其前々飼物を好候人々にも無之只道理のみにて自然手抜けも有久保手杯は最初放したる十分一も不殘二里餘之場所故餌も不與へ樋を抜く時は前方に届出す位之べり故誠に育ち不宜騒ぎ様にも足らぬ程に而翌年は止又また夫々の庭に飼たるを浚て見れば斃た形ちを見た事も無れと是も至て残り少になり是も池の堀損と成たる也乍去山形は夫迄鯰の生たるを見た事もなく鯉の子も取たる事も知らぬ位の處前書の逃け出したる鯉鯰か川傳へに諸方に住家を求たる事と見へ最上川其外の川々に殖て自他の國益と成り眞んの過ち之高名と云へし

一御城内へ己午の方に當り龍山と申高山有り何れの御代なる哉金ノ山之由に而問へ堀したる穴有と聞て見に行て近村之者へ尋問へ其金蔓の土を爲持參瓦師勇治の廣場に而問へ吹したる處詰り小豆粒位の金を得たる事有其節老衆も被參役所引之節なる哉御勝手役人衆も被參たる事有り其後の御沙汰は不知なれ共御勝手御手詰り之御時節故御自費に而は六つヶ敷能き金主に而も出來候節之事成るへし

一右久保手に而兎狩に被爲入候事有り御家老蟻川與一左衛門御番頭御用人に而福井長

左衛門御用人根岸惣兵衛御者頭太陽寺九十郎關口源太夫堀内十太夫長山市郎太夫四頭何れも小頭并手組十五人宛召れ其外御側向一同郡奉行は東嘉右衛門御代官下役等召れ表役人御馬廻り御番方都而上下留守番之者殘候迄に而夫々に持場定り居中性以上嫡子次男三男迄御行列外勝手次第拜見不苦旨に而罷出是又詰場有之御本陣は字石原坂と云平ら山中腹に而三方見晴し能場に御假り屋立ち前成彌勒原に追込御本陣左之方に何拾間之雉子網を張り其網に掛んとするの繩張也其網みの左右に其頃殺生功者之林半之允村岡彌五兵衛兩人司之役也又圍みを洩れたる兎有れば御番方に而福井佐十郎高山新七郎山本佐兵衛三科清兵衛中小性に而根岸彌源治篠原繁藏射留る役割也無足人も大勢被連候處是は御領分村々へ出候人足共を一人に二人或は三拾人御願に相成其追場所之廣狹に寄精情を改指揮する譯成よし人足御預割に多少有御法令書持たざれば圖面のみにては分り兼る所も有れど廣場故貝役徳田衛門も出居萬事相圖を致し乍恐此上も無き御調練と奉存候二里餘之場所大勢之御行列嚙御勇間數御事と奉恐悅候

享和元酉年十二月

先達而追々以書面入御内覽奉願候在所之儀養父但馬守儀明和四亥年羽州山形へ所替被仰付翌年引移候處私高に引競候而は莫大之大城に而拜領後初而在着之砌右塲所警守之義に付而は多年心痛仕并人氣甚宜からず法度之辨薄く尊敬新密疎き土地風に御座候に付領分町下郷中之者共志厚罷成家業相營候風俗にも相移候様乍不及手當等分過に仕候儀に御座候當六月中近在他領之百姓共徒黨仕所々民家打潰山形城下銅町へ及狼藉候に付不取敢早速追退候得共大城所々口々も御座候得は城下地先他領沖の原と申處江夥敷屯仕其外所々に而聲上候節右手配小人數に而は難澁仕人馬共に勞申候得共畢竟百姓共之事萬事取留候事にも無之故追拂退散も仕候右故領分も南江は相越不申候取鎮候始末委く御用番之御方へ御届申上候通りに御座候

一所替以來養父但馬品々心痛仕申置候趣共も御座候故多年城地之儀に付安心不仕要害之義に付而は書面に難相顯義共に御座候何卒御賢察乍然不容易義に付左に申上候一山形城最上出羽守義光領候節東根延澤幡谷長谷堂新庄庄内上の山本庄所々之城何れも同人旗下又は家來持城之由南に金山峠北は鯖根峠并最上川東に笹谷峠西は幡谷峠其外難所を扣遠近に陣屋夥敷有之是又家來住居仕候由に而古跡有之右之通堅固之要

害御座候由烏居左京亮領地之節も右に準し居城仕候由に御座候何れも大身にて羽翼之城陣屋を備候公之繩にて築申候哉取付捨曲輪等無之大城に御座候處當時は右要害羽翼之場所壹ヶ所も領内に無之平原四方掛拂堅貳拾貳丁五十九間餘橫拾九丁四十貳間餘之大城邊他之山々々城中不殘見込中々以拾萬拾五萬石位之高に而も全之備無覺束哉奉存候三の丸拾壹口渡櫓共に廿壹ヶ所他領より之入口街道十八有之裸城に御座候得者五六千之人數に而も可也之手當行届間敷哉に奉存候右之通大城に付明和年中取纏又は取拂之義奉伺其頃御差圖も相濟候得共大造成義に而中々以壹ヶ所に而も取締候儀夥敷入箇に而迎も小高に而は出來兼當惑仕候

右之次第に御座候故多年心痛仕非常之節萬一不覺之次第に相成候而は奉恐入追年入用多勝手向は必至と差支迷惑仕候所替以後武州山形收納高穀相塲甲乙領内手當其外別紙之通に御座候御儀に御座候何卒厚御惠相應之城地へ御引替被成下永世安堵仕御奉公無滯相勤申度心願御座候既に當夏之次第に而は一刻も安心不仕老年之儀頻此段偏に奉願候以上

十二月

秋元但馬守

文化三寅年三月之御願書丸寫

私居城之儀高不相應之大城に而手に餘り當年四拾ヶ年格別之入箇并明和四亥年所替之節之高減收納不足其上米穀下料之土地彼是取交高壹萬百貳十九石餘金八千九百八拾六兩餘年々不足四十ヶ年積り候而は凡高四十萬五千六百六十石余金三拾五萬九千四百四拾兩餘之減に相成近年勝手向相衰就中大阪表分過之大借に罷成四五年以來利潤差引兼不行届面目に相懸打明難申上程之時宜罷成候去歸城後在所之体悉く役人共申聞候趣誠に當惑仕實以萬端必至と差支在邑中之入用賄も江戸表も下金に而相賄候得共是以心痛仕候此上御軍役は勿論不時御用被仰付候節之儀考候得は心外之事共も可有之哉と奉恐入候御儀に御座候廿九ヶ年跡御内願書差出猶又追年數年之以書面御惠之儀者御歡申上盡し候先達而も入御聞候通私儀も明年七拾才に罷成候得は頼も薄く奉存候養父休咎及一期申聞候義有之候得は何卒以御憐恕私存命之内相叶候は、無此上も儀安堵之上嫡子臣三郎へ相讓申度及晩年候迄數年御内願一向御憐察被成下候様此段偏に奉願候以上

正月十五日

秋元但馬守

(在所より之日附)

武州川越の羽州山形へ所替に付込高之内減左之通

高壹萬百貳拾九石九斗四合八勺五才

右同斷に付收納不足米壹ヶ年

米四千四百七拾壹俵三斗六升餘

代金貳千百四拾四兩三分餘

右同斷納永壹ヶ年

永三千百貳拾六^ノ貳百五拾文餘

收納米拂代出羽國下直に付相場違不足壹ヶ年金三千五百七拾四兩壹分餘程

金百四拾兩三分貳朱

見取永減す

惣合壹ヶ年

高壹萬百貳拾九石九斗四升八勺四才

金八千九百八拾六兩貳分餘

明和五子年々寛政十一未年迄三拾貳ヶ年分不足
高三拾貳萬四千五百五拾六石九斗五升五合貳勺
金貳拾八萬七千五百五拾六兩餘
右之通御座候以上

未九月

秋元但馬守

貞享年中より御年寄役被仰付候名前

濟川公御代

貞享

元祿

高山甚五兵衛

三百五拾石

岩田彦助

高山喜左衛門

矢貝清太夫

酒井權左衛門

岡村庄太夫

百石御加増にて

正徳

五十石御加増にて

涼朝君御代

享保十九年寅年

百石御加増にて

田中八兵衛

寛保元年十一月

安中佐左衛門

蟻川與一左衛門

延享四年

持田十左衛門

矢貝清太夫

二百石

間瀬九右衛門

御役料百石

明和六病氣ニ付願
之通御役御免

明和

二百石

島田勘太夫

御役料百石

永朝公御代

安永

高貳百石

關口源太夫

御役料百石

見習

秋元新十郎

御役料同斷

天明

定府貳百石

新井勘兵衛

御役料右同斷

太陽寺四郎左衛門

高山文左衛門

矢貝傳左衛門

寛政五丑

高百五十石

河野左七

百五十石御加増定府年寄役

十一

高二百石

久朝公御代

文化五辰

高二百石

小俣七郎

御役料百石

八未

齋田源藏

右同斷

文化二丑十一月朔日

年寄役

蟻川治部允

天保

下江彦太夫

御役料百石

蟻川治部允

岩田彦助

高山文右衛門

太陽寺四郎左衛門

年寄格中老

岡谷三太夫

天保十四、九月

明和六ニ出ル

福井市郎兵衛

右同人は調書には不當候得共
被勤趣承居候間記置猶可糺

矢貝帶刀

岡村庄太夫

林庄左衛門

福井内匠介

岡谷瑗磨介

太陽寺文雄

再役

蟻川與一左衛門

齋田源藏

田中源次太夫

根岸鐵次郎

田中八兵衛

右之外名前は知居ても年號月日可糺書類少く却而誤りを傳ん事を恐れ凡之順を記置

明和六丑

福井市郎兵衛

岡谷劍吾

岡村左京

新美左兵衛

村山勘解由

高山文左衛門

岩田彦助

福井長左衛門

島田勘太夫

高山甚五兵衛

蟻川與一左衛門

高山傳右衛門

天明二壬寅

高山主税之助

秋元新十郎

新居勘兵衛

間瀬市右衛門

同五己

矢貝傳左衛門

太陽寺四郎左衛門

岩田彦助

新居勘兵衛

間瀬市右衛門

享和二

岡村庄太夫

山下江左太夫

樋山十郎左衛門

寛政七卯

太陽寺四郎左衛門

高山文左衛門

矢貝傳左衛門

河野 左七

樋山十郎左衛門

下江源左衛門

享和二

岡村庄太夫

下江左太夫

樋山十郎左衛門

河野 大助

享和四子

樋山十郎左衛門

岡村庄太夫

下江左太夫

蟻川角之進

河野 左七

河野 大助

同三

岡村庄太夫

下江左太夫

樋山十郎左衛門

太陽寺四郎左衛門

河野 左七

蟻川角之進

文化六己

齋田 源藏

小侯 七郎

蟻川與一左衛門

矢貝 清太夫

太陽寺四郎左衛門

岩田 彦助

文化三辰

蟻川與一左衛門

下江左太夫

岡村庄太夫

岩田 彦助

河野 左七

文化九申

右 同 斷

同十一戌

齋田 源藏

小侯 七郎

岩田 彦助

蟻川治部允

同八年

齋田 源藏

小侯 七郎

岩田 彦助

蟻川治部允

矢貝 清太夫

太陽寺典膳

文化十四丑

岩田 彦助

矢貝 清太夫

小侯 七郎

太陽寺典膳

下江左太夫

同十五寅

矢貝清太夫
太陽寺典膳

文政四己

下江彦太夫
高山傳右衛門
岡谷三太夫
小俣七郎
岩田彦助
同七申
右 同 斷

天保二卯

岩田彦助
矢貝清太夫
小俣七郎
太陽寺典膳
高山傳右衛門
下江彦太夫
矢貝清太夫
小俣七郎
下江源左衛門
高山文右衛門
岡谷三太夫
同八酉
矢貝清太夫

同十亥

下江源左衛門
高山文右衛門
岡谷三太夫
小俣七郎
矢貝清太夫
岩田彦助

弘化二

小俣七郎
岩田彦助
高山文右衛門
蟻川治部允
弘化二
矢貝清太夫
岡谷三太夫
太陽寺四郎左衛門
岡村庄太夫
嘉永元申
岡村庄太夫
岡谷兵八郎
矢貝清太夫
太陽寺四郎左衛門

天保八年酉正月廿四日

御年寄御呼使に而御役所江罷出候處蟻川治部允達

山形御繪圖元に付村山郡中御國繪圖調被爲蒙仰候間右取調懸り被仰付之

大久保朋兵衛 土屋治部助 加藤武兵衛 山瀬新五兵衛 秋元新太

郎 黒子十郎兵衛 後藤權藏

右は是迄不及聞一件に付夫々手分けに而服役候事哉と何れ茂致心配伺候處元繪圖御下に相成たる小判繪圖を寫切繪圖に致夫々領主へ懸合御元繪圖以來川欠變地等は無之哉及問合其否次第出役致し穿鑿之事に而可然旨御沙汰に相成大繪圖之事故新御殿於御使者之間取調差上候處翌成年正月十一日爲御褒美金貳百疋つゝ頂戴之

同年九月廿日

一金三百疋

當春御巡見之節出精相勤候に付被下之

右一條は一件帳に記し月日御姓名は忘れられ共重き御ヶ條故覺居候事共のみ左に記置

公義御代替り壹度は諸國へ御巡見使御差出被遊候御定式之由に而前廣其事御沙汰に相成御留守居役に而も御先格帳も有之右御仕向其外御仕構一切相廻り年寄衆を御下け之事故其通手配は無子細物なれ共只心配成るは町郡奉行代官役所下役等に而御廻り道筋所々へ御用伺御警衛旁罷出候向は御途中何事を御尋有之哉も難計御役江對し疎忽之御答無之様前方々色々心調は致而も是と差たる事無れは無際限其事に當りての外なくと致決斷僕は長谷堂村より御城下町江入口之場所へ致出役居候處御駕籠脇之衆駈抜け參尋候間御途中御用伺罷出候旨申之名札差出候處無程御出御披露之御大儀と計御挨拶有之様早駕籠に而御通過き故見計御跡に付七日町御晝食宿迄罷越御旅中御用伺之御使者相勤候處御念被爲入候段猶宜と計り御挨拶に而ほつと息をつき町會所へ立寄承候處何も替る事無只旅籠町辻番之者將棋を差居候を御先番之衆へ被見答色々誤りても承知なく詰り天童御旅館迄附添參名法を以て事済に成りたる由

一 天保十三年四月

志朝君町會所へ被爲入吟味被爲聽候由御沙汰に付平常町郡奉行詰所を御居間と定單子本箱等取片附大掃除致盜賊壹組隠し賣女壹組金子出入歟と覺壹組白洲上段口へ障

子屏風立廻し其中に而聴し召され候事有り

其節は土屋勘右衛門加藤武兵衛山瀬新五兵衛

一山形旅籠町は旅人宿一式商賣之處三萬石之城下上の山は宿々に温泉を引湯治人も有り飯盛女も大勢居故自然泊人も多き故旅籠町に而も同様藝妓娼妓抱置度旨其頃如何成譯歎不叶處文政の末に至り時勢一變して願之通被仰付乍去家中の者は決而不揚様被仰付願人共は年來之願望成就故雀踊して歡何れ哉越後酒田に美婦買出しに飛出し追々着に相成候一時繁華に相成町方金満家は費夜揚げ詰する者も有り中にも井筒屋忠治と申者は未つしやにそゝのかされ大金を遣ひ荒し仕舞には馬鹿殿様と云なされ御まけに親より藏住ひ之謹慎被申付やら又家中若者は法度になれは猶羨敷同町に髮結子之吉と申上手之髮結有其憐に洗湯や有り抱子らば夕仕舞に入湯に来る其女共は襟を剃顔を剃のと云て立寄る若者共は右子之吉に髮を爲結見計ひ湯に行けば不殘賣婦を見るに能く初は子之吉先立に而宿や裏門より這入裏土藏に而遊へは誰にも知れぬと慎み氣有りたれども其頃は男女入込み之故忽ち賣婦共と心易く成り脊中を流させ直約する事に成たる故子之吉大に不興する事に成りたり猫に鯉節此道計は

餘り深入せざれば可なるべし

武藏國

一高三萬六千九百五十四升七合三勺四才

八拾七ヶ村
三拾九ヶ村

出羽國御新領

一高三萬六千九百五十四升七合三勺四才

武州御舊領御收納米高分

差引

米千四百八拾六石六斗八升四合五勺三才

武州分不足

武州と相場違にて

差引

永八千五百拾三貫三百九拾四文三分貳厘四毛

此石壹萬六千七百六拾六石貳升三合三勺八才

同斷不足

御當所當座三ツ八分九毛二二七ニテ

御高に直シ

五萬九千六百八拾壹石九斗八升壹合四勺八才

三四 不足

右は去寅年御高替に而御物成并相場違減高書面之通に御座候以上

卯十月 御地方役

右は天保十四卯年矢貝清太夫殿江戶元占役迄御沙汰之趣に而同所より取調方申趣候に付相廻候寫也

天保十三寅年八月武州御領分三萬六千石餘羽州御城附に替地被爲蒙仰其節御受取に相成候村々左之通

但村々高之義は別帳差上候に付略す

上杉彈正大弼様御預所々四ヶ村

漆山村 高櫛村 貫津村 前小路村

御代官

大貫治右衛門様 拾貳ヶ村

荒町村 田井村 今町村 高木村 長町村 清池村 山寺村 下東山村 上東

山村 高野村 青野村

御代官

添田市郎治様 貳拾二村

谷柏村 上櫻田村 土坂村 草矢倉村 神尾村 志戸田村 黒澤村 前田村

院役村 釋迦堂村 妙見寺村 行澤村 内表村 鮎洗村 榎澤村 中野村ノ内

中郷村 平鹽村 杉下村 達摩寺村 三河尻村 長崎村

以上

右村々壹度は御巡見遊はされ度尊慮之處何れも遠村に而御道都合も御一泊に不成村方御初に相成候得共村數も多故先づ郡奉行御名代に而相濟候村方も有之處改元有て弘化二年十一月晦日上州館林江御所替に相成翌三年正月廿五日館林受取方に出立致居壹人役に而繁忙を極居候間其後之處は都而不知なれ共不計ラ御殘地有之漆山村へ御陣屋等に而御物入之中の御物入に而有之候

一於秋元家は外御並方よりは御手厚く諸職人御召抱其頃御評判たる由故取調候處左之り通

御拵師 高井源右衛門 彫物師 佐野利八

甲冑師	明珍善兵衛	弓師	谷武兵衛
槍師	山本彌市	同	松本銀六
矢師	永野林右衛門	鐵砲師	西澤平吉
研師	安達定十郎	鞘師	小堀松五郎
白銀師	大塚定吉	針師	恒山檢校
柄卷師		經師	松本忠八
瓦師	勇治	壁塗師	天野源吾
仕立師	石井三平	同	細井仙助
大工棟梁			

右之外馬役醫師員役等洩たる者多々有るべし

山形經濟志料編纂部規程

第一條 本部ハ山形商業會議所會頭ノ管理ニ
屬シ山形經濟志料ノ蒐集及編纂ヲ目的トス
第二條 本部ノ事務ヲ掌理スル爲ニ左記委員
ヲ置ク
委員長 一名
委員 若干名
第三條 委員長ハ部務一切ヲ掌理ス
委員長ハ必要ニ應シ書記ヲ任用ス
委員ハ經濟志料ノ蒐集及編纂ヲ擔任ス
書記ハ庶務ニ從事ス
本規程ハ大正九年四月一日ヨリ實施ス

大正十年十月三日印刷
大正十年十月八日發行

【非賣品】

發行所 山形商業會議所
山形市香澄町字大寶寺一九〇番地
編輯兼 酒井軍太
發行所 熊谷末藏
山形市旅籠町五一三番地
印刷者 熊谷末藏
山形市旅籠町五一三番地
印刷所 熊谷活版所

505
2

稟告

本誌は山形地方經濟志編纂の目的を以て山形商業會議所の一事業として蒐集せる資料を刊行致し候ものにて將來隨時續刊仕度見込に有之候就ては當地方關係の古記録各家萬覺帳古帳簿古證文道中日記隨筆等精粗細大を問はず江湖御所持の各位より當會議所に御貸與被下度切望に堪へざる所に候

山形商業會議所

山形經濟志料編纂部

終